



Carosello Napoletano

1961. 2～3

上映映画解説

No. 69

ナポリの饗宴 色彩15巻

Carosello Napoletano

伊・ルックス映画1954年作

原作・脚色・監督…エットーレ・ジャンニーニ

脚色……………ジュセッペ・マロッタ

ミジョ・デル・グロッソ

撮影……………ピエロ・ポルタルービ

音楽…………ラッファエーレ・ジェルヴァジョ

振付……………レオニード・マシーン

—— キャスト ——

サルヴァトーレ……………パオロ・ストッパ

からかわれる美女……………グレリア・マターニア

ブルチネッラ……………レオニード・マシーン

ブリジダ……………マリア・フィオーレ

雑貨屋……………アントニオ

接吻娘……………マリア・ピア・カジリオ

シジーナ……………ソフィア・ローレン

マルゲリータ……………イヴェット・ショオヴィレ

1954年6月1日丸の内東宝で封切

1954年カンヌ国際映画祭で国際大賞

『ナポリの饗宴』について

飯 島 正

イタリアのレヴィウ映画——でなくてもミュージカル——はなかなか日本では見られない。最近の『ヨーロッパの夜』はそれにちかいものだが、レヴィウとはすこしちがう。『ナポリの饗宴』はぼくたちが見た唯一のレヴィウ映画だといってもいい。しかも大変新鮮な魅力にみちた作品である。

監督者のエットレ・ジャンニーニについてはあまり知らない。映画のひとつというよりもむしろラジオや演劇のひとつで、このレヴィウ映画も、彼が舞台上で上演して好評を博したレヴィウの映画化だときいている。

なにしろ戦後イタリア映画は、ネオレアリズモ——色にぬられていた。そこへこんな豪華なにぎやかなミュージカルを見せられたのだから、これをはじめて見たと

き、ぼくはまったくびっくりした。おそろしく景気のいい・コッチリした・派手な社会的ミュージカルだからである。だが、ここにもネオレアリズモは生きていた。

——というのはほかでもない。これはナポリという特色のある場所を背景にして、その歴史的・文化的考察をちゃんとやっているからである。ネオレアリズモの地方主義がここに立派に生きていた。しかも大体が庶民の生活をえがき、いわゆるナポリ気質をムキだしにして、政治論までやっている。これが実は元来のレヴィウというものなのである。それについては、脚本を書いたジャンニーニ、マロッタ、デル・グロッソの3人のうち、ジャンニーニがナポリ人であること、マロッタがナポリ人の生活をえがく有名な小説家であることをおもいあわせる必要があろう。もともとナポリは文化的にいても、イタリアを二分する区画の一方の旗頭で、ローマやミラノとはちがった地方文化の中心なのである。文学や演劇でもナポリは別あつかいになっている。東京に対する大阪以上に特殊なのである。それがこの映画のまず存在理由であり、それを新鮮大胆な技術のレヴィウにしたてたところに、映画としての独特の価値がある。ともかく一地方の社会と文化をこのようにレヴィウ化したミュージカルは いままでになかったとぼくはおもう。

この映画の狂言廻しをつとめるのは、ナポリの艶歌師で楽譜売りのエスポジート（パオロ・ストッパ）一家である。住む家もない貧乏だが、根がのんきで、浮世を茶化してうたいのめす楽天主義者・そして現実主義者・つまりはナポリ気質の代表者である。この男の楽譜が海にとんで波にゆられながら見せる音楽の題名から、レヴィウの舞台が展開されて行くという脚色である。

歴史をテーマとしたナンバーでは、不死身のナポリ人気質がおもしろい。ナポリはむかしから外敵にとったりとられたりした土地だが、それこそフィーニックスのようにナポリ人は灰のなかから立ちあがる。ナポリの史実を知っていると、実にこれがおもしろくしくまれていることがわかるが、ぼくにもそれが十分にわ

かったとはいいいかねる。

だが逆にこれはおもしろおかしくそれを一般のひとに知らせたものと見れるので、ここがこのレヴィウ映画の大した価値であろう。もちろん有名なナポリ民謡がふんだんにとりいれられているが、それがナポリ人の生活に直結しているので、寄席の一コマ一コマのナンバー集だとはいえないのである。

さらにこれは技術的にもすばらしいミュージカルである。ことにナンバーからナンバーへのうつりかわりのたぐみな工夫やこれにエスポジート一家の生活がからむ点、本当に心にくいばかりのうまさである。ことに讃嘆せざるをえないのは、景気のいいミュージカルのなかから庶民的な生活力ゆたかな感情がにじみでる点は、いくらほめてもほめきれないこの映画の美点である。

こんなミュージカル（特にレヴィウ映画）はその後お目にかかったことがない。

（2月12、15、19、22、26日、3月1、5、8、12日の9回、毎回2時から上映）

1960年度特別鑑賞会上映映画一覧

再上映1960. 4. 「朝から夜中まで」（独、1920）

64. ク 5～6 「土と兵隊」（日活、1934）

65. ク 6～7 「白鳥の死」（仏、1937）

66. ク 8～9 「バーバラ少佐」（英、1941）

67. ク 10 「十字路」（衣笠映画、1928）

68. ク 11-12 「阿部一族」（東宝、1938）

再上映 ク 12 「カリガリ博士」「朝から夜中まで」「ヴァリエテ」「生れはみたけれど」「百万両の壺」「巴里の屋根の下」「舞踏会の手帖」

69. 1961. 2～3 「ナポリの饗宴」（伊、1954）

国立近代美術館フィルム・ライブラリー